

異文化理解に対する学習者の意識調査

藤原 愛¹⁾

Attitude of English Learners toward Intercultural Understanding

Ai Fujiwara

Abstract

The aim of this survey is to investigate the attitude of English learners to intercultural understanding in Japan. The cultural dimension of English learning has risen in prominence since the 1980's. There has also been much interest in English as a Lingua Franca (ELF), because English is not only used to communicate with native speakers, but also with people from all over the world. Based on this idea, intercultural understanding has been built into today's English program. Whereas intercultural understanding is an important topic in English learning, English learners do not seem to pay much attention to it. To investigate their attitude to intercultural understanding, questionnaires were distributed to 155 junior high school students in Tokyo. The statistics showed that the students currently considered intercultural understanding far less important than most other aspects of English learning (e.g. grammar, vocabulary etc.); however, they felt that intercultural understanding would be essential in the near future. The article concludes by discussing the results and their implications in regards to teaching and learning intercultural understanding through English.

Keywords: intercultural understanding, English education, communicative approach, English as a Lingua Franca (ELF), English as a international language (EIL), Common European Framework (CEF)

キーワード: 異文化理解, 英語教育, コミュニカティブアプローチ, 共通英語, 国際英語, ヨーロッパ共通参照枠

はじめに

今日の英語教育においては、外国語である英語を言語としてどう教えるかという問題と共に、英語教育が担う「異文化理解」をどのように取り扱

うかという問題が数多く見受けられるようになった。この背景には英語が、英語母語話者との会話で用いられる言語に留まることなく、第二言語として英語を学ぶ世界中の人々とコミュニケーションをとるためのツールとして捉え直されていると

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

いう流れがある。

異文化理解の必要性が指摘される一方で、教育現場では異文化理解のための英語とは何なのか、また英語の授業を通してどのように異文化理解を促すのかというのが年来の問題となっている。長い英語教育の歴史の中でも、異文化理解の必要性が説かれるようになったのは、1980年代以降のことであり、現時点での確立した指導法は無いに等しい。言い換えれば、授業で異文化理解をどのように取り扱うのかは、教師一人一人の技量によるところが大きいのである。

本稿では、異文化理解の変遷と現状をふまえたうえで、今後の英語教育における異文化理解の指導のあり方を探る第一歩とし、学習者が異文化理解に対してどのような姿勢で臨んでいるかを明らかにするための「英語学習の際に学習者が重要とみなしている技能・学習項目は何か」という観点から意識調査を行った。この結果をふまえたうえで、今後の異文化理解教育で取り組むべき課題について述べていく。

1. 異文化理解教育の背景

1.1 異文化理解教育の流れ

外国語または第二言語の使用と教育において、文化的側面の理解の必要性が顕著になったのは1980年代からである (Baker, 2009)。日本でも、訳読方式を偏重する英語教育に対する批判を背景にして、1988年に文部省の『中学校学習指導要領』は、その目標に「積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度」を謳い、さらに1999年の『新学習指導要領』では「実践的コミュニケーション能力」の育成が謳われるようになった (鈴木, 2000)。20世紀後半のコミュニケーションアプローチの出現により、英語教育の流れは「話された言葉 (spoken language)」へと向かい、英語学習はドリル学習離れをし、コミュニケーション的な活動の中で教えることが提唱されている (Setter and

Jenkins, 2005 ; Wei, 2006)。このことから、日本の英語教育はコミュニケーションアプローチを中心に用いた、国際コミュニケーション能力の育成及び国際理解、すなわち異文化理解が理念上の特徴と考えられる。

この変化は教授法だけでなく、中学校英語教科書の登場人物からも読み取ることができる。コミュニケーションが重視される前の中学校英語教科書では、我々がステレオタイプとして描く英語話者 (アメリカ人、イギリス人など) が多く見受けられたが、1980年代を境に、中学校英語教科書の登場人物には、英語を母語としない登場人物 (インドネシア人、中国人など) が見受けられるようになった。このような英語に対する認識の変化について、本名 (2010) は「英語は特定の国の言葉とか、特定の人々の間で使う言葉というよりも、世界の多くの人々が、色々な国の人々に対して使う言葉ということが出来る」としている。

同じく1980年代には、諸外国での小学校への英語導入が始まり、日本でも早期英語教育についての議論が始まった。小泉 (2010) によると、1986年の臨時教育審議会で「コミュニケーションの手段としての英語」の育成を目指し、行政が英語教育の早期化を求めたのを発端に、2000年度からは「総合的な学習の時間での国際理解」としての英語活動が導入され、2008年度の小学校学習指導要領では、5、6年生の必須領域として「外国語活動」が規定された。小学校における英語教育には未だ様々な議論がなされているが、宗 (2008) は、小学生の段階では、異文化に触れて肌で感じるといった、「国際理解」以前の「国際感覚」と呼ぶべきものを育てて行く必要性を説いている。このように、英語教育の中での異文化理解の重要性は増しているが、実際の授業において英語教育と異文化理解教育をどのように融合させるのかという新たな問題 (日野, 2008 ; ロング, 2008) が、英語教育界における年来の課題となってきている。

1.2 異文化理解のための英語とは

異文化理解のために、そしてコミュニケーションを円滑に行うために、学習者が身につけるべき英語とはどのような英語であろうか。この流れの中で発音教育の現場では、発音が正しいかどうかではなく、相手に理解される (intelligible) 発音かどうかにかき重きが置かれるようになった。この背景には、英語を国際語 (English as a International Language)、地球語 (English as a Global Language)、世界語 (English as a World Language)、共通語 (English as a Lingua Franca (ELF)) として捉える動きが関係している。それまで英語を外国語として学んでいる学習者にとって、モデルとなる英語はアメリカ英語 (General American) かイギリス英語 (Received Pronunciation) であり、これは学習者が英語母語話者と会話する状況を想定していたためである。しかし近年の国際化に伴い非母語話者同士が英語で会話をする機会が増えたことにより英語という言語の位置づけを捉え直す必要が生じている。

寺澤 (2009) は、世界語としての英語の特徴として「語彙の豊富さ」を挙げている。実際 Oxford English Dictionary (OED) に収録されている50万を超える語のうち、外来語の語源は日本語を含む350以上の言語に及んでおり、「国際色豊かな語彙」といえるであろう。国際語としての英語には、今までの英語圏の文化的概念にとらわれることのない、柔軟性が求められていることがわかる。

Baker (2009) は、英語が English as a Lingua Franca (ELF) として存在している現在、言語と文化の関係について再考していく必要性を説いている。今までの学習言語が目標としてきた伝統的文化理解を超えたところにある、ダイナミックな異文化の存在を意識し、その異文化をもつ人々との関係を上手に築いていくスキルを身につけていくことが、ELF 学習には必要であるとしている。英語に対しては「英語文化圏」が存在するが、ELF 自体には文化圏が存在しない。そのため、ELF 学

習者は今まで必要とされてきた言語の体系的知識はもちろんであるが、それと同時に異文化間で行われる実践的コミュニケーションのための交渉術、解決策、適応力を身につけることが求められる。

1.3 他国での言語教育・異文化理解の現状

1980年代以降の英語に対する認識は、日本のみならず世界的な共通認識となっている。本名 (2009) の報告によると、多民族国家であるマレーシアでは、Vision 2020 国家ビジョンのもと、国家的アイデンティティは母語であるマレー語で、国際的アイデンティティは国際言語である英語で培うという活動を行っている。具体的には全ての公立小学校・中学校・高等学校で、科学と数学の教育言語を英語にすることを試みており、国際社会で先進的な役割を果たせる人材育成を政府主導で行っている。また中国では、小学1年生では標準中国語 (Putonghua) の発音と文字を徹底させているが、英語教育の早期化には躊躇せず、英語は小学校から大学院まで必修科目となっている。英語をグローバルコミュニケーションの言語として認識し、中国中央テレビの英語チャンネルの設立など、英語メディアの強化に力を注いでいる。

異文化理解のための言語は、英語だけに限らない。例えばヨーロッパでは「ヨーロッパ言語共通枠」(Common European Framework of Reference for Language: CEFR) を欧州評議会が定めており、母語プラス2つのEUの公用語の習得が推奨されている (河原, 2006)。EUには唯一の公用語というものは存在しない。この政策からわかるように、EUでは英語を共通語とすることなく、EU諸国の公用語を対象に外国語教育を進め、お互いの言語を尊重することで、近隣諸国との異文化理解をすすめていくという立場をとっている。

それでは、英語を公用語とするアメリカ、イギリスではどのように異文化理解に取り組んでいる

のであろうか。これらの国では、移民の流入により国内に「異文化」が多々存在するため、その現状を踏まえた言語政策が取られている。大谷（2008）によると、イギリスでは1992年から11歳より外国語の必修化、さらに2002年にはイギリス教育技能省が国家言語教育改革計画として「外国語の学習—全ての国民が、生涯を通して」を発表した。アメリカでは、1999年に「21世紀の外国語学習基準」が出され、アメリカ国民が英語を含めて合計2言語の能力を身につけることを21世紀のアメリカの言語基準とするとした。また2006年には「国家安全保障言語構想」として、従来アメリカ国民の関心が薄かったアラビア語、中国語、ペルシャ語、ヒンドゥー語、日本語、朝鮮語、ロシア語、ウルドゥー語を「重要語」に指定している。

このように異文化理解に対しては、国や地域によってその目指すところは異なるものの、国際化社会の中でどのように対応していくか、その政策が国政として行われている。

2. 異文化理解に対する教師の意識

これまで見てきたように、異文化理解教育が日本はもとより世界の国々で重要視されていることが明らかとなった。では、実際に日本の教育現場にいる教師たちが、異文化理解をどのくらい重要視しているか、そのアンケート結果を記載した調査報告書がある（全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会，2001）。この報告書は、実際に高等専門学校の教師に技能・能力に関する8つの項目「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」、「発音」、「単語」、「文法」、「異文化理解」を5（重要）～1（不要）の尺度で採点してもらうというものであった。その結果、全体としては、全ての項目が5ポイント中、3.4ポイント以上と、どの項目もそれなりに高い数値を示しており、教師が英語教育におけるあらゆる学習項目を重要であると考えていることは確かである

が、敢えてポイントの低いものに注目するならば、「発音」の重要度が最も低い（平均値：3.42）、続いて「文法」（平均値：3.83）、異文化理解（平均値：3.86）という順になっており、日本の現場における「異文化理解」への認識が比較的低いのではないかと考えた。教師にとって重要度が低いと認識された場合、その項目が授業で取り扱われる時間も少なくなる恐れがある。

3. 異文化理解に対する学習者の意識調査

異文化理解教育は、時代的流れからコミュニケーションのための実用的な指導の重要性がさげられる一方、現場における調査では「異文化理解」が他の指導項目よりも比較的重要度が低いという結果となった。しかしこの結果は教師側から見た「異文化理解」への評価であり、学習者はどのように感じているのか調査する必要があると考えた。

3.1 調査の目的

本調査の目的は、「英語学習の際に学習者が重要とみなしている技能・学習項目は何か」について明らかにすることである。

3.2 調査の方法

私立中学校3年生の生徒を対象に英語に対する意識調査をアンケート形式で行った。始めに英語の学習期間と英語を学ぶ目的についての質問を設定した。また意識調査に関しては、全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会（2001）のアンケート調査における「高専英語教師の意識調査」より、「技能・知識」の質問項目を抜粋し使用した。具体的な技能・知識は「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「発音」、「単語」、「文法」、「文化（異文化理解）」の8つである。質問形式は学習者用に変え、「以下に挙げるそれ

それぞれの能力は今のあなたにとってどの程度重要ですか。5（重要）から1（不要）の尺度で答えて下さい。」とした。また、「高専英語教師の意識調査」には含まれていなかったが、前出の「今の」という文言による調査結果と比較するため、「以下に挙げるそれぞれの能力を、あなたの周りの学習者（クラスメート）と比較した場合、自分の能力をどう評価しますか。5（優れている）から1（劣っている）の尺度で答えて下さい。」及び「以下に挙げるそれぞれの能力は今後のあなたにとってどの程度重要となると思いますか。5（重要）から1（不要）の尺度で答えて下さい。」の2つの質問項目を加えた。前者の自己評価に関しては、学習者が重要とみなしている項目と能力の自己認識との間に関連性があるかを知るためのもので、自分の学習が不十分と感じている項目に関しては重要度を高いとみなす結果が得られるのではないかという考えによるものである。また、「今」と「今後(将来)」に対する重要度の認識を比較することで、受験や試験などに縛られる学校生活の中での英語学習と、大学や社会で自らが選び学んでいく英語学習での意識の違いを明らかにすることができると考えた。質問項目は全部で24問である。

3.3 分析方法

これらの「英語学習の際に学習者が重要とみなしている技能・学習項目」について、質問別に各項目について重要度の平均値を算出した。その後、

現時点における技能・学習項目の重要度を他の結果と比較するため以下の3つのグラフを作成した。

1. 高専教師の結果との比較
2. 自己評価との比較
3. 将来的な技能・学習項目の重要度との比較

3.4 調査の対象

調査の対象は都内の中高一貫の私立中学に通う3年生155名で、その中には帰国子女も数名含まれるが、人数が少ないことや海外経験がなくとも小学校から英会話に通っている生徒もおり、言語学習の背景を明確に分けることが困難なため今回はすべて分析対象とした。英語の平均学習歴は40ヶ月（3年4ヶ月）で、155人中英語学習歴が3年未満の生徒は123名であった。また、英語を学ぶ目的（有効回答数143）では、「英語が必要だと感じるから」が48名で最も多く、次に「授業・受験があるから」（47名）、以下「英語の文化に興味があるから」（12名）、「その他」（10名）、「英語に興味があるから」（6名）となっている。このことから調査対象者の多くが、授業・受験を含み何かしらの形で英語を「必要」と感じていることがわかった。

4. 調査結果

学習者がどのくらい各技能・学習項目を重要とみなしているかについて調べたところ表1のような結果が得られた。

表1 技能・学習項目の重要度の平均値

	現時点での重要度		自己評価		将来的な重要度	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
聞く	4.11	1.07	2.44	1.16	4.40	1.05
話す	3.72	1.24	2.23	0.99	4.18	1.23
読む	4.15	0.98	2.51	1.10	4.11	1.10
書く	4.09	1.00	2.40	1.08	4.07	1.18
発音	3.35	1.14	2.53	1.11	3.82	1.21
単語	4.28	0.97	2.40	1.10	4.30	1.06
文法	4.10	1.05	2.28	1.08	3.98	1.21
文化	2.65	1.36	2.42	1.31	3.20	1.45

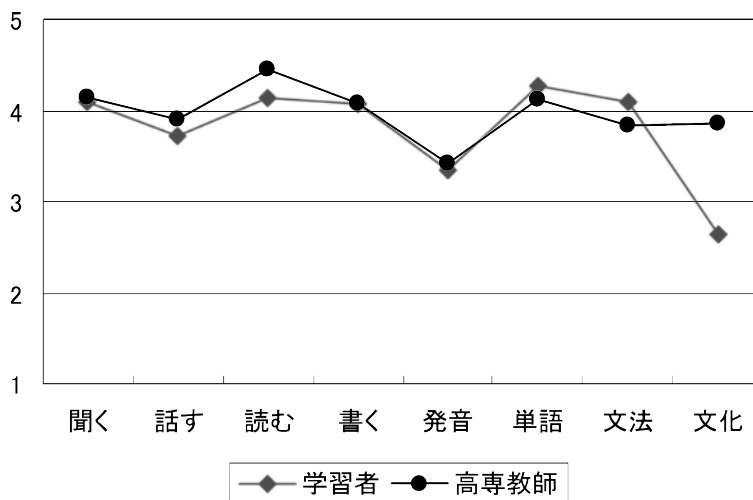


図1 「学習者の現時点での重要度」と「高等専門学校教師による重要度」の比較

現時点で最も重要とみなされているものは学習項目の「単語」であり、続いて「読む」、「聞く」、「文法」、「書く」、「話す」となっている。現時点では「文化（異文化理解）」が最低ポイントとなっており、続いて「発音」が低いポイントを示している。

またこれに対し、学習者が行った自己評価では全ての技能・学習項目が2.23から2.53の範囲におさまっており、比較的低い数値間での比較ではあるが「発音」の自己評価が一番高いポイントを示す結果となった。

将来的な重要度の結果で最も高かったものは「聞く」で、続いて「単語」、「話す」、「読む」、「書く」、「文法」と上位6つに関しては、順位の変動はあるものの現時点での重要度と同じものとなっている。「発音」と「文化（異文化理解）」は現時点での重要度よりもポイント数は増えたものの、順位としては同じく7番目、8番目となっている。

上で得られた「現時点での重要度」と全国高等専門学校英語教育学会：高専英語教育に関する調査研究委員会（2001）での結果とを比較したのが図1である。

このグラフからほとんどの項目において教師と学習者がほぼ同じ重要度を感じていることがわか

る。しかし「文化（異文化理解）」の項目のみ重要度の認識が大きく異なっており、この項目に対し教師は「重要」であると考えているのに対し、学習者は重要という認識が低いという結果になった。

次に「現時点での重要度」と「自己評価」の平均値をグラフにしたところ、図2のような結果が得られた。

グラフを見ると、自己評価では各項目がほぼ横ばい状態になっているのがわかる。自己評価の低いものほど重要度が高い、もしくは低いといった傾向ははっきりとは見られないが、「発音」と「文化（異文化理解）」以外では、重要度と自己評価が連動しているように見受けられる。「現時点での重要度」が著しく低い「発音」と「文化（異文化理解）」は、自己評価においては他の項目と大きなポイントの差がないことがわかる。

図3は「現時点での重要度」と「将来的な重要度」の平均値をグラフにして比較したものである。

このグラフで見ると、「現時点での重要度」に比べて「将来的な重要度」がはっきりと高いポイントを示している項目が、「聞く」、「話す」、「発音」、「文化（異文化理解）」となっており、コミュニケーションで必要となる、より実践的な技能や知識が

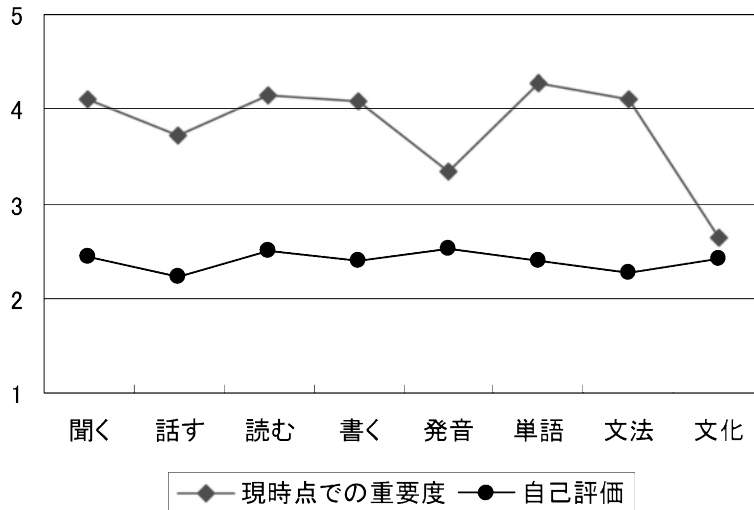


図2 「現時点での重要度」と「自己評価」の比較

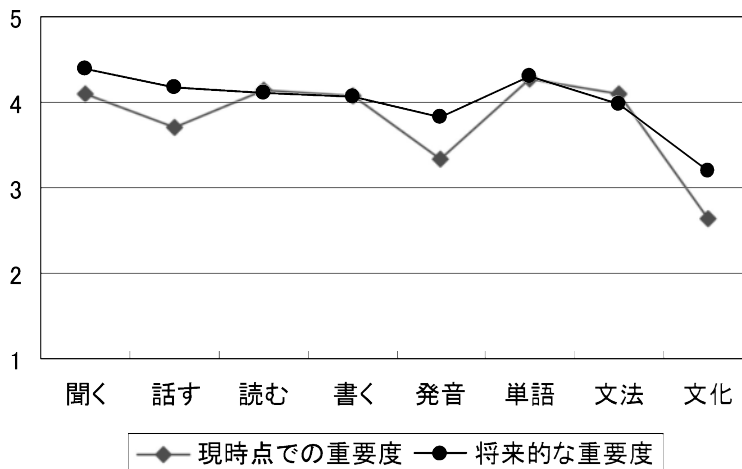


図3 「現時点での重要度」と「将来的な重要度」の比較

重要だと認識していることが読み取れる。

5. 考察

技能・学習項目の「現時点での重要度」の調査では、現在の学校英語教育を反映するかのような結果となった。上位4つの「単語」、「読む」、「聞く」、「文法」となっていたが、このうちの「読む」、「単語」、「文法」はまさに中学・高校での授業の進め方、試験の形式に沿ったものであるといえる。

このように結果を解釈すると、調査を行った学校が進学校であることから、「聞く」の重要度が高い理由については、この技能をコミュニケーションの手段として捉えていると考えるよりは、平成17年度のセンター試験から導入されたリスニング問題を始めとする、試験・受験対策の一環として学習者は認識していると捉える方がより自然ではないだろうか。そうすると試験や受験にあまり関係しない「発音」「文化（異文化理解）」のポイントが低いことの理由も見えてくる。

「自己評価」では全体的に低い数値となった理由として、良く解釈すれば志が高いため現状に満足していないとも考えられるが、悪く言えば学習者の英語への自信のなさが現れているといえる。このような二面性で「発音」と「文化（異文化理解）」のポイントが高かったことを考えると、良く解釈すれば、実際にこれらの項目に関する学習者の能力・知識が他の能力より優れているとも考えられるが、逆に言えば「発音」や「文化（異文化理解）」に対して抱いている目標が低いということになる。

「将来的な重要度」での結果は、「聞く」、「単語」、「話す」が上位にきており、学習者の英語学習に対する意識が英語でのコミュニケーションを視野に入れた結果となっているのが興味深い。

以上の結果を前提にして比較のためのグラフを解釈していく。まず「教師」と「学習者」を比較したグラフでは、「文化（異文化理解）」以外がほぼ同じ軌跡を描いていることがわかる。これは教師が英語の授業でどこに重点を置いているかを学習者が読み取っている結果であると考えられる。教師の価値観がそのまま学習者に反映された形であるとみなすこともできる。唯一「文化（異文化理解）」に関しては、教師の思いと学習者の認識にずれが出ている。この理由として考えられるのは、やはり学習者が自分の進路を左右する試験に直接的に関連のない項目には興味を示さないことと、英語教師は必然的に外国人と接する機会も多くなるので他国の文化にも目を向けるようになるし、大人の常識として海外での時事問題にも意識的に興味を示すが、学習者はそのような場や必要性、時間がないためでありと考慮される。

この調査結果にある種の示唆を与える研究がある。Mohri(1990)は、1982年から1988年の7年間、学習者に対する異文化への興味の調査を行った。結果は1985年を境にその数値が急激に落ちており、その理由として、(1)メディアの発達により学習者が興味を持たなくても異文化を感じることができ

ていること、(2)この頃よりALTや留学生が増加傾向に見られ、外国人と自ら接しようとしてなくても周りに外国人がいる状態であること、(3)日本が経済的に成長したので、海外から日本に来る人の数が増えわざわざ海外に行く必要がなくなったこと、などを挙げている。

「現時点での重要度」と「自己評価」の結果の比較では、「自己評価」の平均値がほぼ横ばいであることから、両者の間に目立った関連性は見受けられない。あえて言うならば、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能において、「文法」、「単語」における2つのグラフの傾きが似ている傾向にある。ただ本稿の「調査の方法」で述べたような、「自分の学習が不十分と感じている項目に関しては重要度を高いとみなす結果」は見受けられなかった。

「現時点での重要度」と「将来的な重要度」の結果の比較では「聞く」、「話す」、「発音」、「文化（異文化理解）」の4つが、「現時点の重要度」よりも「将来的な重要度」のほうで高い数値を示し、学習者が学校での英語学習を終えた後はコミュニケーションを重視した英語の習得を目指していることが読み取れる。このことはまた、「教師」と「生徒」の比較の結果を前提とすると、学校における英語教育が、社会に出た後の学習者のニーズに沿っていないことを示唆している。

6. 結論と今後の課題

英語教育の研究に携わるものとして、今まで教える側、研究する側の立場から教育現場を捉えがちであったが、今回の調査で学習者から見た英語教育の現状の一部を知ることができたことは貴重である。異文化理解教育の重要性を唱える研究者がいる一方で、日本の教育現場では異文化理解を実践する以前に「どう教えるのか」という問題があり、今後この理想と現実の差をどう埋めていくかが大きな課題になると考えている。異文化理解

教育がどのような形で行われれば一番効果的かを、教育現場の現状を踏まえて調査していく必要がある。現実的な問題として、限られた授業時間の中で教師はどれくらいの時間を異文化理解教育に割けると考えているのかも、現時点では不明である。この現状を打破するには教授法のみならず、教師と生徒その両者の意識を変えていくことも求められる。

今回の調査は、英語教育における異文化理解についてのものであったが、EU やイギリスの多文化主義政策で見てきたように、異文化理解は必ずしも英語を媒体として行わなければいけないわけではない。異文化理解と英語をあまりにも強く結びつけてしまい、英語至上主義に走ってしまうようでは、Kubota and McKay (2009) が指摘するところの *double monolingualism* (母語と英語のバイリンガルをよしとすること) になってしまい、これは他の外国語を疎かにしてしまうことにつながる。河原 (2006) の指摘にあるように、東アジア市民同士がコミュニケーションをする時、英語を使うことが多くなってきていることは確かだが、英語に通ずるだけでなく、互いの言語である中国語、韓国語、日本語にも関心を持つ必要があるのではないか。このような「外国語教育」における異文化理解についても今後は考えていく必要がある。

また今後は、異文化理解という学習項目として捉えた言語教育の枠組みだけでなく、学習者の最終目標の達成にはアイデンティティ (identity)、態度 (attitude)、動機付け (motivation) が重要な役割を果たす (Setter and Jenkins, 2005) ということも考慮し、このような観点からも異文化理解教育について考えていきたい。

参考文献

Baker, Will. (2009) The Culture of English as a Lingua Franca, TESOL Quarterly Volume 43, Number

4: 567-592

Kubota, Ryuko and McKay, Sandra. (2009) Globalization and Language Learning in Rural Japan: The Role of English in the Local Linguistic Ecology, TESOL Quarterly Volume 43, Number 4: 593-619

Mohri Kimiya. (1990) Intercultural Understanding and the Teaching of English: Contributions by Japanese Exchange Students, annual review of Japan Society of English Language Education: 135-147

Setter, J. and Jenkins, J. (2005) Pronunciation, Language Teaching 38, 1: 1-17.

Wei, M. (2006) A Literature Review on Strategies for Teaching Pronunciation. (ERIC Document Reproduction Service No. ED491566)

大谷泰照 「異文化理解教育が今、日本に必要なわけ」『英語教育』3月号 (2008): 10-12

河原俊昭 「多言語・多文化主義から見たこれからの英語教育」『英語教育』2月号 (2006): 32-34

クリストファー・ロング 「日本の英語教育における異文化コミュニケーションの課題」『英語教育』3月号 (2008): 33-33

小泉 仁 「小学校の外国語活動」『英語教育』10月増刊号 (2010): 8-9

鈴木賢司 「英語教科書と異文化理解」川村学園女子大学研究紀要 第11巻 第1号 pp41-50

宗 誠 「小学校の異文化理解教育で大切にしたいこと」『英語教育』3月号 (2008): 13-15

寺澤 盾 「世界語としての英語 過去・現在・未来」『英語教育』8月号 (2009): 24-26

本名信幸 「地球語としての英語」『英語教育』10月増刊号 (2010): 22-23

本名信幸 「多言語主義の今 マレーシアと中国の言語政策から見えてくるもの」『英語教育』8月号 (2009): 17-19

日野信幸 「国際英語教育を通しての異文化理解」『英語教育』3月号 (2008): 30-32

全国高等専門学校英語教育学会: 高専英語教育に関する調査研究委員会 (2001) 「高等専門学校における英語教育の現状と課題—新しい高専英語教育を目指して—」学校の特色を生かした英語教育カリキュラム作成に向けての企画調査. 平成13年度科学研究費補助金 (基盤研究(C) (1)) 課題番号 (1389006) 調査報告

APPENDIX 英語学習の意識調査に用いたアンケート

英語学習アンケート調査

◇英語学習歴： 年 ヶ月

◇あなたが英語を学ぶ目的は何ですか。もっとも当てはまるものを選んで下さい。

1. 英語に興味があるから
2. 英語が必要だと感じるから
3. 英語圏の文化に興味があるから
4. 授業・受験があるから
5. その他 ()

Part A： 英語について以下の質問に答えて下さい。

1. 以下に挙げるそれぞれの能力は今のあなたにとってどの程度重要ですか。5（重要）から1（不要）の尺度で答えて下さい。

a) 聞く力	5	4	3	2	1
b) 話す力	5	4	3	2	1
c) 読む力	5	4	3	2	1
d) 書く力	5	4	3	2	1
e) 発音	5	4	3	2	1
f) 単語力	5	4	3	2	1
g) 文法	5	4	3	2	1
h) 異文化理解	5	4	3	2	1

2. 以下に挙げるそれぞれの能力を、あなたの周りの学習者（クラスメート）と比較した場合、自分の能力をどう評価しますか。5（優れている）から1（劣っている）の尺度で答えて下さい。

a) 聞く力	5	4	3	2	1
b) 話す力	5	4	3	2	1
c) 読む力	5	4	3	2	1
d) 書く力	5	4	3	2	1
e) 発音	5	4	3	2	1
f) 単語力	5	4	3	2	1
g) 文法	5	4	3	2	1
h) 異文化理解	5	4	3	2	1

3. 以下に挙げるそれぞれの能力は今後のあなたにとってどの程度重要となると思いますか。5（重要）から1（不要）の尺度で答えて下さい。

a) 聞く力	5	4	3	2	1
b) 話す力	5	4	3	2	1
c) 読む力	5	4	3	2	1
d) 書く力	5	4	3	2	1
e) 発音	5	4	3	2	1
f) 単語力	5	4	3	2	1
g) 文法	5	4	3	2	1
h) 異文化理解	5	4	3	2	1

（2011年11月30日 受付）
（2012年1月12日 受理）